



新句兄弟  
完

中村俊定文庫  
文庫 18  
233



新句兄弟



往昔句兄弟ありは彼集あり  
晋子松常あつてしるく一句く  
の塊超反轉——く兄弟の  
ちあけを結るるに予ひるるこ  
是を思ひ穿るく此冊子我  
編む前兄弟のこもく反轉  
はるるあひるししはるる



うらをのまゝむらゝく出らね  
あしあしを書付はるゝ  
是を梓さちりをもろく世々  
とす

享保歳次丙辰弥生 天池齋魚貫



一番

兄

百菴

門松を添へて買つるもの

弟

雪堂

霧亀の賣りあいた門下松

門毎にこゝろ小松のまゝり添へ  
るゝ買つるもの  
よ秀作一句乃め



新年春日併相催し門の  
松竹のよわちまきつげて  
勃と霧巻の賣へかまむる  
俳の作送之賣と買とを對  
ては終も此二句をのつ  
實ありあつてあつて兄弟の  
所ありあつてあつて

二番

兄

宗瑞

福引の遊はり

かき握りのむらり

け子童部のけり  
燈をも福引のあつて  
はめさやい  
物とてあつて  
ちれを祝の口癖  
うけ合も二をあつて

三番

兄

空翠

水鳥下かごと鳥羽の裳

弟

あさりの間に隠しあはる音は

あさりのついでしよ妹はち毛待  
のいよふもつせもいれも晴れ  
しよあぬ中りひさしくあはる

あさりのあはしあまうらあ  
あさりのあはしあまうらあ  
うらああまのうらああさり  
間あさうらあはしあまうらあ  
間あさうらあはしあまうらあ  
縁をむすあまうらあ

听番

兄

故一

一二新麻ぬあまあはる復あはる

才

海も霞もあつたあつた友の力

夏も夜月の光もあつたあつた  
夕ぬめあつたあつた清き  
の夜もあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

五番

兄

沾山

まのけも元の蛙此の音か

才

まのけも元の蛙此の音か

まのけも元の蛙此の音か  
のあつたあつたあつたあつたあつた  
作を交換あつたあつたあつたあつた

又さくらあしを言ふもさうら  
しうあまらくもさうら  
はしうも前もさうらてねあ

六番

兄

素丸

死と思ふ親をあるま相撲 丸

才

果しと命なりしはさゆの取

とまのまゝに北と海力のほめを  
垂仁天皇七の月當麻の村に  
勇士あまの命をえあつたの  
りふ力強よるの海をもささるる  
て皇はよしをひ召く是まふ  
るまの命を群臣あつたはれり  
出雲の国をさけさねのこあり  
野見の宿祢とすもの侍に  
よしを羨す則是を知らし  
海力強よるる野見の宿祢



ちいしけりまかりたるらん 願速  
 腰まきりしりりりりりりりりり  
 けいりりりりりりりりりりりりり  
 はりりりりりりりりりりりりりり  
 のりりりりりりりりりりりりりり  
 するりりりりりりりりりりりりり  
 初んりのりりりりりりりりりりり  
 初りりりりりりりりりりりりりり  
 元あけりりりりりりりりりりりり  
 扱つちりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりり  
 世りりりりりりりりりりりりりり

七番

兄

祇明

あやめりりりりりりりりりりりり

才

夕々夜りの夜に重ぬるりりりりり

露のりりりりりりりりりりりりり

えおの義もしおめいこちやせん  
只はつまよおおの夕アにせむ  
翌月まきまひ日まらぬく尾  
おうられのうらむおの義もせ  
ぬるまら

八番

兄

沾測

梅咲く朝露の家とまらぬ  
才

とる開く毒を曆の山を(か)

梅花用不絶春眠がのつらう  
の家とくわ笑りん  
来々もあもあめ山里の住人を  
あつらひらく梅を諸木のさき  
あつらひらく毒の至るま知るま  
もむ先をころみといへる兄の  
おらるる中への朝起すこ似て  
似ぬおの兄才まら

九番

兄

祇徳

死さうまへはつゝもよし花の山

才

死はらうまへはつゝもよしの山

様はらうまへはつゝの山は様もよしく  
よこ〜〜もねもももはらう〜〜あま  
貴賤群集のさほあつゝもよ死別

拾番

兄

為邦

まよひらうまへはつゝの山はよ  
よこ〜〜もねもももはらう〜〜あま  
下〜〜もねもももはらう〜〜あま  
せ〜〜もねもももはらう〜〜あま  
山のあまもももはらう〜〜あま  
ねもももはらう〜〜あま

笛あまらうまへはつゝもよしの山

カ

おのれをいづれをいづれをいづれを鹿

女のをける足跡まうく作れり笛すうく  
秋の鹿をもうけはよきといふ古きものを  
向中ありみえけ控居命の古文  
事おのてひきまゝいづれをいづれを鹿  
——————はらばら鹿のり  
かまうくをまうく申す獵人のいづれを  
いづれをいづれをいづれをいづれを

カ

おのれをいづれをいづれをいづれを鹿  
はらばら鹿のり  
かまうくをまうく申す獵人のいづれを  
いづれをいづれをいづれをいづれを鹿  
——————はらばら鹿のり  
かまうくをまうく申す獵人のいづれを  
いづれをいづれをいづれをいづれを鹿

床よりのもろもろのまのむかし  
あの上つ〜みてもは〜み  
うひまのい〜老ぬるまは  
ま〜い〜まのまもはまの  
自然の急おれゆ〜あ〜す  
はま〜昔つらつらの男出らつ  
まのい〜まのまのま〜わく  
うら〜ま〜し〜のれを  
思ひこれをおと〜の一生を  
天命とあ〜ま〜は〜あ〜

五

はれと天命をおせ〜  
ま〜い〜ま〜命ま〜つ  
うらむおろ〜のま〜ら  
あ

十一番

兄

女  
芙水

村艸の雨もあお出く〜

あ

草の菴ほ〜あ〜腐れ〜

二句を

腐草一けし〜

蜜とあは

十二番

兄

老前

赤枯や高尾の〜い〜あ〜い〜

元

同じとをあれを紅あめの山〜

〜枯けは秋の叶枕遠起

の旅功者ろまののたをさし間  
〜れとあすも高尾の山〜  
すまひ〜い〜ものあ〜い〜  
お〜

あ〜夜あつおみ山〜とをほと  
もさ尾山をみちの〜り  
〜つろふ〜

此二句を是遠望

十三番

兄

訥子

凌雲志何のあけしる夕日か

か

のうせんをたぐ深出々旭た

凌雲の旭夕日各情の盛を  
いへん

十叩番

古

兄

蓮之

果も皆佛のるる路あり

か

帝仏のるるを教るおちをうま

世の中を鬼いひうくいひ果くも  
いふ何ういふのるる趣くも  
後世をへの上まけくの句化  
あまをいへるあるへん

くま、佛のちる花あやうり  
花の字いゝ春云々あつたり  
とつと短お句中あつてく大をま  
あつていふ心の筆に付れをん  
ゆるしあつてわづの句をさう  
真心をさむむあつてあつて  
一年の草あつて生者必滅のこ  
とを待たもあつてけのるをさ  
あつていふあつてあつていふ  
より縁覚といふあつてあつて

五

十五番

兄

青我

谷ゆき梅ら曲を散りたり

水

吹あらしとらう哉風の次女が

一片花飛滅却ス春風飄ス萬點眼前  
の景色曲り字をさしを隠へ  
三つとらうあつてあつてあつて



風の姿とてんまに正歌をよ  
ものよりうらちをたのむ

十六番

木も降るも  
まうらん

兄

乾什

大船子ひらりも波に成る目た

弟

浪もよき野浪の時雨の波舟

おもむきおのちのちのち  
大いほのほしとくも只揚る  
ふあそくもあしとほあつと  
冬の小川とて

浪もよき野浪の時雨の波舟  
くく舟のくく横  
の心を向中おあせま

十七番

兄

文綸

むつゝお榻の中より一書を

か

七重八重散れし一書の榻に

一重さうらゝきさける兄あり  
散れし一書とらゝむる弟あり

十八番

兄

常仙

牛車先へ吸売りし鳥のる

か

草のる文とつらん坊も

着るもくしあまをうつの山道  
我よりさきより誰への報し  
あつんと客魂の情  
あけつとつらんを伊勢物酒の  
うつの山をとおらんすまを

みまごころみういこつこたあり  
其心も反轉しこゝろも知り  
修行者もなす

十九番

元

院雨

花とも不為り世に守り且

亦

名はつらむはゆと知る童部

花の奴とく花の野に叶川  
木のこまけ入る川を鎌の  
手んもあもさるぬ子業  
あを刈のつと地可味  
あをりも相違ふては刈  
くあとのみ知りし星の  
童アも何のあをしもらぬ  
ははをりとは

二十番

兄

湖十

桶の口より魚をひきとる胡蝶哉

才

桶の口より魚をひきとる胡蝶哉

余とぬのむかひはつと  
いふは桶の口よりひき  
とる蝶をひきのちをひき  
とるは桶の口よりひき  
とるは桶の口よりひき

二十一番

兄

半溪

くちや亀の齡をひきとる

才

くちや亀の齡をひきとる

よろつ代の龜をひきとる  
名をひきとる其多きよろつ代の龜を  
ひきとるは隣のことろをひきとる

のこす

龜の齡乃減りしをさしこのこす  
只五十年の八回すまをのこり  
まいしをせむと二句まの心を  
かきしるをり

二十二番

兄

調柯

名月を思ひ切し雞の声

片

七

名月を猿や撞けむ鐘の音

ゆきある社のまをこもこぬわ  
ういし月の惜しきまを打  
うはれしうのうのハ吉し  
ませめかすもまふしとあまて  
しやまの月を撞きし人か  
ましきあらし月をうれ  
て猿や撞きむとこいひし  
こころをり

二十三番

兄

乱絮

米着よ雪の古郷いづこぞ

中

初雪や我らるるも五六尺

越後のおのころは戸をせきま  
雪を清くのこして古この  
雪ういゝういゝとせむいぢり

此もつゆおも五六尺ともしに  
二のふをきりしはあかのう

二十四番

兄

超波

はみきりやけ道あかき鯉の道

中

五月のあけぬあいの風引

水底の玉藻くくれば住む難の  
くまらさくこいもあはれあはれ  
くほらあはれあはれあはれあはれ  
の川もあはれあはれあはれあはれ  
を舞<sup>カサ</sup>層の道遠くくもあはれ  
ひもあはれあはれあはれ

二十五番

兄

長鶴

鴉ももろあはれしてやあまの柿

か

雲の柿矢も目もあはれあはれ

形もあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
霜のくくればあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ

うも折れ矢も尽しり

二十六番

兄

羊素

くまし日のいんまのましきみのぬ

弟

とまもすのいんまのましき今日り

日と折のいんまのまよの赤ま

まのいんま

二十七番

兄

魚子

武勢の限するはしき乃峰

弟

むさし野の野此野乃果の峰

むさし野の限するはしき乃峰





くの上のまなこも真女の情死

二十九番

兄

貢橘

氷鳥りおすすう岸を氷らせに

亦

あつちの風をたの風

まよふ夜もささゆき  
 たりとも氷るなはなはつり  
 氷るさやと踏こへるおま  
 すしつらうまもふれよほり  
 次す氷はつらつらつら  
 のちつらつらつらつら  
 まつらつらつらつら

三十番  
兄

舊室

柳の白き花の如くは

中

我が世の如くは

春の如くは

合自由の如くは

情の如くは

暑の如くは

心古の如くは

心古の如くは

廿一番

兄

徳我

蚊の多くある如くは

中

蚤虱の如くは



尸侍る

市三番

兄

巴船

町のそらいおをなすおの昏の鐘

市

入おのおぬをたおぬをぬおぬ

二句ち入相の鐘をむろぬを  
とりの骨の心をしりていひ

市三番

兄

和推

降雪の音らぬおぬをひりし竹

市

おぬをぬおぬをぬぬぬぬぬ

竹のむらほを雪のまき荷り  
おるまじ可中へ持せしき  
果りぬといふあまのこ  
雪におもをせぬとせし  
こほ中子竹を隠しし

卅五番

兄

樓川

茶のむらほを唐茶を吞せし

茶のむらほ新發達りし茶

園中の茶のむらほのあ  
唐茶のむらほし身ひよりぬ  
乳合は  
又志あちのむらほの布子  
茶といふまもの縁を中へ付る

卅六番

兄

存義

小僧受けぬ藤めらるる時鳥

才

遊女子け夜寝ぬらるる時鳥

昼より天狗の竹経めらるる  
おもつるしるるのまは  
あまのの風靡るもまらるる

卅七番

兄

溪梁

公界十年のこまらるる  
一に麻ぬるるまらるる  
上さるる合るるまらるる

まらるるまらるる

才

まらるるのまらるる





卅九番

兄

米仲

送火や焚くも持て六の夜

牙

おろしやや送らる水のまじり候

あふくのは世へ世へもわらへ  
よよち度のいよー報恩経や  
とていり中もも七月に盂蘭盆

とあこれを一の糸アと侍る

ききありの果乃日ハウの具いあ

水にお候候候候候候候候候候

具は送る越出候候候候候候候

とてくわわの候候候候候候候

るりまの日あり候候候候候候候

情六のゆい候候候候候候候

い候候候候

おろしやや送らる水のまじり候

流しり候候候候候候候候候候

思ふよもむしり付る

四十番

兄

百測

初秋の廿日とてくおつとの夜

弟

又月廿十日とてく夏の夜

おまのあや定めなる乃と  
くく日数二十日くく月  
のさあ

四十一番

兄

無来

是く又拾めぬく鉢とて

弟

是く世を拾ぬく女とて

許由よりさうこのあまのこゝろ  
かたしとく捨つ是をいふ  
捨ぬ瓢の音を討つて一夜  
のさむらひのさむらひのさむらひ  
捨ぬさむらひ晋子の句  
伊豫一もさむらひのさむらひ  
と侍るさむらひのさむらひ

四十二番

兄

来川

捨る玉化物屋の山はら

才

化の位といふ山 桜

らつこの山はらるるの位  
とくさむらひのさむらひ  
さむらひのさむらひのさむらひ

次々々々々々々々々々

四十三番

兄

舎人

鞍はり流る海を原

才

思入一日見さ流る原

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

昔より一日不見如三月  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

四十四番

兄

局菴

やうもの物の清い 轉うぬ

才

よくはやくいふ 轉うぬ

一の句にやうま 一おと惜みはやく  
淋一と惜し一 一句の中乃 惜みはやく

面白一はやくいふと 福とやくいふ  
まのまのまのめうは 福の心あや  
ころ淋一と惜しはやく 惜みのころ  
伝うぬ

四十五番

兄

僧 雲阿

か  
しんがうに 初時 阿

此の事なるを以てしるべし

此の事なるを以てしるべし  
 此の事なるを以てしるべし  
 此の事なるを以てしるべし  
 此の事なるを以てしるべし  
 此の事なるを以てしるべし

四十六番

兄

尾谷

梅嶺の師を以てしるべし

亦

梅嶺の師を以てしるべし

梅嶺の師を以てしるべし  
 梅嶺の師を以てしるべし  
 梅嶺の師を以てしるべし

四十七番

兄

栢蓮

竹の葉も寒山さつと工夫物  
才

蜂乃巢也拾得らん暫時待

いさ—より寒山さつと工夫画師も  
帚もてる散をとりわけはる何物の  
巢も取合する筆さつと工夫也

とてらに其上拾はるのさつと工夫  
いさ—より寒山さつと工夫画師も  
帚もてる散をとりわけはる何物の  
巢も取合する筆さつと工夫也  
作らるる—予早もとの  
いさ—より寒山さつと工夫  
のさつと工夫—いさ—より寒山さつと工夫  
作らるる—予早もとの  
いさ—より寒山さつと工夫  
のさつと工夫—いさ—より寒山さつと工夫  
作らるる—予早もとの  
いさ—より寒山さつと工夫  
のさつと工夫—いさ—より寒山さつと工夫  
作らるる—予早もとの

室の若きいこ入り万の  
かゝいこあめをばはれ  
すくし伝ふといは是をり  
前のエ夫は後とあり

四十八番

兄

幸徳

炬のけり傍をくあふ  
才

松のまか縁はむみちが

二句を火の山越ああ  
る色は炬の火乃ゆく  
まをいし  
一句を炬の火の程  
いひまをり

四十九番

兄

柯木



初午のうらなり後記

才

さし子さるのまぢはめぢ

其のうららのまぢの  
らのとけい

五十番

兄

未示

こつしんが鵬タカの水を赤れ

才

いりめしき言れまじうのあ離せ

鵬  
一名沈鳧貌  
似鴨而小背  
上有文 順傍若

まつくろれを鵬タカの水を赤せ  
境内の入口も赤れなく赤  
いりめしき言れまじうの  
あちあちしき言れまじうの

五十一番

兄

晋阿

何々をわ師をの後乃貝考し

才

け後の師走あつたや極貝

子孫の後此貝の數くを  
仰まの申々何事あり  
師もあつたすの極貝もあつた  
めつら(る)

五十二番

兄

白主

とつ此たふらあつたのち

才

初解ちるふらあつたのち

夏のつらつらあつたのち  
けつあつたのち

よき

このぬいぢのまかぢをぢぢ  
ふまふまぢぢぢぢぢぢぢ

五十三番

兄

安士

蓮葉し一葉くさ日ぢぢぢ

才

蓮とくしへまふりぢぢぢ

是叶是花用一遍けふ一葉くの  
葉ぢぢぢぢぢぢぢ  
ふの日ぢぢぢ蓮の直ぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢ

五十四番

兄

羅千

厄拂ひをのぢぢ厄も何一海

才

たねの果はあつたや海の高

くちのちいさなやちいさな  
果は西の海はあつたやちいさな  
やちいさな

果はちいさなやちいさな  
ちいさなやちいさな  
ていづちいさな

風の果はちいさな海の高

五十五番

元

其裔

舟もたつたやちいさな海の高

舟

舟もたつたやちいさな海の高

あつたやちいさな海の高  
ちいさな海の高  
舟もたつたやちいさな海の高

くちくちくちくち

五十六番

兄

沾風

巨燿しけにゆくささく

亦

山極 糸より花の根の根

らのとけおくくの極お  
とや巨燿も志水果とむ  
里も皆教もてりてを  
曳のらのまくくちくち

五十七番

兄

撰居

此のくちくち一つり荷すをせし

亦

とらぬれ重た言具も嫉妬のつら

あつめさうあおのつらあつめ二日  
の歳支度あを中しく雨を  
は終りや一言もあつめ  
あつめの後あつめを向中し  
おつせり

五十八番

兄

其樹

あしはや破る解して行ふを

弟

引はの海に思ふ入江は

汐浦素れえいさあみ  
ゆく海を遠くあちまの  
あまさをあれくいつこの破  
あつめを思ふあれん  
引はの入江海くと

鳴きまゝの海へさしこむるは  
しるれ

五十九番

兄

咫尺

皂角のほろほろは

お

皂角の我もあはれ

おろろのほろほろは  
おろろのほろほろは  
我があはれは  
おろろのほろほろは

六十番

兄

岑水

川あはれは

お

川水も後ほゆるいぬ月一回

しみきれきあつたつとまき  
川水もまき色無しのいぢり  
あつたつとまきのいぢり  
思ふもいぢり

古の傳は(岡)ぬらりの古口毛  
うへもいぢりいぢりいぢり  
お像お像也

六十一番

兄

麥阿

あなをむと遊よ星のいぢり

オ

まわりもあつたつ星のいぢり

池のいぢり廣くあつと  
うへも星月あつたつとあ  
うへもあつたつ  
又あつたつあつたつ入星



の影ししきり何れを  
むらさ。

六十三番

兄

侘れ世をこのいふ世を場の家

才

侘れ世を酒の家や世をいふ夜

はる家六師管根の湯乃客アト  
いおせしし其ほりりりり  
貧老くあり衣薄りりり  
寒中清りりり世をいふ  
りりりりりりりりりりり  
世をいふの述作におりりり  
人間の世をいふりりりりり  
りりりりりりりりりりり  
上宿世いふりりりりりりり

侘し  
雨の衾も湯のあまも  
菊の侍もさしも  
め貪人の境界は先ぬ世の  
ゆりかたにあらん

抑此つづきのほ  
句を作者を志は  
石上あまの  
の復乃此多

里

をては吉田の朝臣  
おほんむとらり師を  
祇敬霊神といつ  
おありつあも句も漏  
湯の衾も湯のあまも  
のあまのあまも  
あまもあまもあまも

くね、竹のまのへ  
あを師のまのへ  
をまのへ  
のみるまのへ  
給のまのへ  
まのへ

東都

本町三丁目

書林 西村源六

彫工 芥澤彦七

文刻堂書梓目錄

江戸通本町三丁目西村源六

全一冊

民家分量記

常盤貞尚作 全五冊  
士農工商の才おんり  
切りかきしるす

野總茗話

同作 全四冊 右ノ後篇  
神傳傳の大志と  
ついでしるす

民家童蒙解

貞尚作 全五冊  
分量記の後篇人のう  
り孝ののちとてんる

田舎莊子外篇

伏見橋山作 全六冊  
世の苦未をいりて  
同作 全三冊 右ノ後篇

河伯井蛙文談

同作 全四冊  
同作 全三冊 右ノ後篇  
うら川と各々の同巻と  
いづく同く人のの上と

天狗藝術論

同作 全四冊  
剣術の奥義とまゝ一巻  
諸義兵源秘を論せ

六道士會録

同作 全五冊  
武家の内法と平生の  
いづれを空記をわつむ

英雄軍談

同作 全五冊  
他を吐しをりて軍の  
奥義と一りす

近代世事談

菊池治孝作 全五冊  
近世の家人家用衣履食物  
室の原始を詳記せ

今川腰越状

御家流消息

初学消息集

假名文章

万要書札

風月往來

庭訓往來

愛蓮説

歸去來辭

建初賢文筆 全一冊

王垂氏八筆 全一冊  
尚用はあま文章とあつめ  
いづれかあまははははの  
記す

同筆 全一冊  
尚用はあま文章とあつめ  
いづれかあまはははの  
記す

同筆 全一冊  
尚用はあま文章とあつめ  
いづれかあまはははの  
記す

同筆 全一冊  
尚用はあま文章とあつめ  
いづれかあまはははの  
記す

同筆 全一冊  
尚用はあま文章とあつめ  
いづれかあまはははの  
記す

同筆 全二冊  
大字四行

廣澤筆  
行書

同筆 行書

自隨落 先生 風俗文集 及古部二冊 北華輯

蝶比遊 全三冊 北華選 松島紀行名所

不思議の口 全二冊 自隨落先生作 北華輯

古今智恵枕 河得玄宅輯 全三冊 弟の重宝の仕方の 信をいらす

武家軍談 全三冊 ひろくろま入

同軍鑑 全四冊 ひろくろま入

武家功者物語 全三冊 ひろくろま入

画圖百花鳥 狩野探幽筆石中子字 全五冊 五ヶ所百鳥の 仕の詩身及白と記す

縛本裁艸 上二載の河とあつて 下三載の河とあつて 必書一冊 全三冊

新後明題 梅風集全四冊 新明題 追加近代の秘蔵の身 全三冊

泉山景境詩歌集 及入堂上地下の侍 全三冊 齊との也

續景境詩歌集 全一冊 名家の詩言と集

和歌戀衣 大和河の秘伝とあつて 知人のたつと全一冊

正運紀略 大運成吉作折本一冊 五代平号時勢のかりと かくく記す

老子本義 勝藤隱作 全二冊 明の邵弁の注とまゝと共 2のり不と補ひけす

老子答問書 北藤隱先生作 老子学の大考と向答号

蘆隱稿 南郭先生点檢 蘆隱先生著述詩文

明詩選 全十三卷 自九至十三巻 全 自壹至四後次 全五至八

歴代帝王畵 南郭考訂長門坂氏号 只朝歴代帝王畵各号 皇朝歴代帝王畵各号 皇朝歴代帝王畵各号

文筌小言 同作 全一冊 助語用字の汁と没あり 甚学者ニ益あり

銀燭帖 廣沢先生門人 蘭源内書

中書措訣 姜廷憲著 全一冊 筆法の玄味と記す

芙蓉菴八勝帖 折本一冊 烏石先生号 行草手本

使者帖 烏石先生書 冊書手本

登樓賦 同筆 八分字手本

草書十字文 同筆 全二冊 石摺

七物帖 同筆 行書全一冊

禮部韻 烏石先生技開 高宗御書 全六冊

江戸此茶 全三冊 横切本 江戸半大夫一曲とらつむ

前句集附本 江戸此茶 百十巻 渡の志 餘つらひ

俳諧のすり山 大燦 全一冊 前句集附本

増補芭蕉翁四季段々全三冊 去きし四季茶神話及夜夜 空夢哀傷詞女名々とのり 露月集 全三冊

俳諧句靈宝 同集 全二冊 月次追如金玉の声音と ひろく

同寄進能 同集 全二冊 月次あま追

同閑の梅 同集 全二冊 面白極白のえと入百人々追 赤井の氷筆めつらき集

同友安久死 追世名有誹入 全一冊 四季段々

同有渡日記 有渡の紀行 全一冊 友白手仙

同犬椿葉 逸之集 全二冊

同何者姿 板花述 全一冊

釋親考

附 筆行説 伊藤藤東涯著 全二冊  
釈族の稱呼と雅言の考  
き法儒の漢と委の考

七經孟子考文

官刻 全三十二冊  
五經論語孝經孟子の  
宋板と明板の誤と正す  
官刻 徂徠作 全二冊  
吳城代の吳同と考へ  
くわく記す

度量衡考

全三冊 新井筑後守板  
の文と集の考

白石先生餘稿

停雲集

翻明令

伊呂波童蒙抄

冠註董董大全

和刺局方

醫學的

同孫娘の雲

立園集 全一冊

同反古拾遺

同林藤集

同支前集

同彩勺兄弟

同井蛙問答

同其砧

同風乃末

同挑揚

同硯沃

百華樓北還 全二冊  
旧知の佳句手仙自作多  
ひろくあつめりす

雲上連琴 全一冊  
非語の古句と川て多々  
あり

古今多々集 全二冊  
文彦を重んず  
吳名の特人との記す

彩勺と葉 全一冊  
其誤と注して初はの  
誤り

半溪著 全一冊  
後句で同答し支の誤と  
引て取戻とあり

貞佐七回忌 有佐  
平砂集 全三冊

其角嵐雪遠忌  
寒和集

其角嵐雪追善の歌仙  
宋阿集

黒客作 全二冊 硯沃  
野河の紀行多々手仙  
あり

醫要談

全三冊 未刻  
楚山先生撰

阿彌陀如來出現記

全二冊  
盛典述のりりり

宗分禪師語録

全三冊

捷徑辨義

沙門善崎作 全三冊  
真言密修の本味を片  
のりり記す

大般若經轉義

折本一冊

粥飯日用鉢式

全一冊 旭昌述  
鉢式の法と考(記す)

遺身往來傳

全一冊 諦聽述  
遺身の奇特と記す

聖道衣料編

盛典作 全三冊  
衣料の考(ハハハハハ  
ハハハハハ)

道中行程重寶記

懐中折本一冊

古今茶道論辨

浪谷玄春作  
全一冊

同吾妻海道

奥州松嶋松がま八景  
みちの記並発句

同あゝの翁

毛越集 全二冊  
俳諧文集入

同續れ代

全二冊 舟仙合さ長  
青交堂長齋

同千とれ煉

華仙集 全三冊  
武蔵野乃乃と長書板  
江戸宗近十平

同古すたれ

全一冊 芭蕉翁五十年忌  
湖十集 飯々文集不  
と

同老山集

全一冊 推人登々と  
黒客集

同後河百員

全一冊 月夜後河百員と  
あり

同江戸七歌仙

全一冊 獨吟集  
江戸俳諧宗近元人

同芭蕉林

全一冊  
多光連中祭と茶

芭蕉翁  
真細乃 拾遺

全一冊  
尚青輯

萬世 江戸御町鑑

全二冊 町奉行年中  
月表亦立合月評定  
式日七力日公方組  
四年多月表町名主  
死町火消、乃は組合  
纏人更付因細其外町  
委細繕写、之

萬世 江戸方角組合纏附 一冊  
一冊 徳中両面  
一冊 鳥石先生筆

新刻 楷書十字文

新刻 草書十字文

得水 八景詩歌

春臺 碑帖

上父 書

唐詩 聯選

全二冊 南郭先生作  
鳥石先生筆  
全一冊  
同筆  
全三冊 近日出来  
鳥石人校

俳諧 綾錦

綾錦 鳥山彦

後篇 古雪中菴

漢 蘇分韻

能諧 卯花衣

能諧 温故集

能諧 問答抄

箱居涼作 全三冊  
後く名号と集て乃注釈と  
如能門派の事  
同作 全二冊  
去より一千百首といひの式流と  
あはすは親交。序破  
吏登初 嵐雪  
後く雪中菴多太  
未刻  
全六冊  
鳥石人校 近日板行

二冊 吏登輯

全二冊 連谷輯  
九七百年末古久久叙并  
當時の如正ノ撰之

全二冊 半素先生作  
并能諧の古式口語傳

